Japan Society of Obstetrics and Gynecology

生涯研修プログラム

2. レクチャーシリーズQ&A

3) 多胎妊娠の管理

慶應義塾大学講師 名 取 道 也

多胎妊娠における周産期異常の発生は胎児，母体ともに単胎妊娠に比較して高率である．これらのうち最も頻度の高い問題は早産であり，最も重症度の高い問題には双胎間輸血症候群（TTTS）や双胎の一児の胎内死亡があげられる．このレクチャーでは多胎管理の基本となる双胎管理上の問題点を紹介する．

双胎の管理の第一は一絨毛膜性双胎と二絨毛膜性双胎の鑑別である．二卵性双胎のすべてと一絨毛膜性双胎の1/4が二絨毛膜となるが，絨毛膜数の診断はTTTSおよび双胎胎児の一児死亡の場合に不可欠の情報であり，妊娠初期の超音波検査により高率に判断可能であることは重要である．

早産の予防は双胎管理上最も頻度の高い問題であるが，所見のない患者に対する頚管縫縮術の有効性は証明されておらず，現状では安静が第一の選択である．28週以降の未熟児では良好な成績が得られている現在，より早期の早産を予防する意味から20週頃からの安静が適当と思われる．

TTTSの診断基準として以前より用いられている20%以上の体重差および5g/dl以上のHb差が本症に特異的ではないとする報告がある現在，確立されたものはないが，一児の羊水過多と他児の羊水過少は重要な所見である．一児の胎内死亡時の対応についても絨毛膜数が重要な情報となる．近年の生殖技術の進歩から多胎妊娠の管理はその重要性が増加している．

4) マタニティエクササイズ

田中ウイメンズクリニック院長 田 中 泰 博

ヒトの直立二足歩行は，広い範囲を，重力に抗して小さなエネルギーで持久的に移動し続ける生活形態への適応として成立したもので，全身持久力（有酸素運動能）が主たる体力の指標とされるゆえんである．このような人体の機能特性にとって，現代の運動不足と過剰栄養摂取は身体諸機能全般を低下させ，成人病，アレルギー性疾患などを増加させている．

さらにヒトの分娩形態は，直立二足歩行がもたらした子宮口の下方転位と知能の発達による頭部の異常肥大に対する適応形態として「産道通過が可能な範囲で，できるだけ成育した未熟児を娩出する」という相反する二面規制を課されているため，これらの環境因子による影響は極めて大きい．

このような妊婦に対するマタニティエクササイズのあり方と，効果や安全性について解説するにあたり，次のような知見について報告する．

① 子宮収縮には妊娠31～32週にピークがあり，33週以後に腹緊減少期が存在する．

② 妊婦の姿勢と姿勢制御に関する特殊性について立位重心位置の後方偏位，Dynamic Rangeは不変，屈曲弛緩現象（前傾時脊柱起立筋活動停止位置）の角度増大などがみられた．

③ 妊婦の体脂肪率について言及する．また，妊娠の進行につれて増加する皮下脂肪の増加率は下半身の皮下が最も高くなる．

④ 妊娠初期から分娩後6カ月までの骨密度，血中の骨吸収・再生マーカーその他を検出し，周産期の骨代謝回転に言及する．

NII-Electronic Library Service